

2009 近畿まほろば総体レポート

「君が今 歴史の新たな ページを創る」

全国高等学校体育連盟テニス部
常任委員 新居 弘行

<はじめに>

「君が今 歴史の新たな ページを創る」をキャッチフレーズに、青春の感動と笑顔と涙のドラマ、今年のインターハイが奈良の地で展開された。

会場の橿原市はわが国初の都城、藤原京が特別史跡藤原宮跡として残っており、明日香村は 1400 年前に律令国家体制が初めて形成された時代における政治・文化の中心地域であり、そのときの風土が住民によって今日まで維持されている。歴史的な土地で自分たちの新しい記録の 1 ページをそれぞれ創って欲しい、という願いが大会スローガンに込められている。

<開会式>

総合開会式が奈良市鴻池陸上競技場で開催されたため、その前日の 7 月 27 日、監督連絡会において優勝旗の返還が行われた。



<団体戦>

男子ベスト 8 は次の学校。

湘南工大附 (神奈川) ・関西 (岡山) ・名古屋 (愛知) ・清風 (大阪) ・四日市工 (三重) ・静岡市立 (静岡) ・大成 (東京) ・秀明英光 (埼玉)。

男子は戦国時代を象徴するかのように、2 年連続でベスト 8 に入ったのが湘南工大附と秀明英光だけであった。東海地区からは 3 校が入り、名古屋が準優勝、四日市工が 3 位と活躍が光った。

第 1 シードの湘南工大附と名古屋の準決勝は、シングルス 2 が 1 時間足らずで湘南工大附・今井。ダブルスは名古屋・戸田・中川がとり、勝敗はシングルス 1 の近藤 (湘南工大附) と古田 (名古屋) にかかった。ダブルスが終わった時点でセットポイントは 1-1。両者ともチームメイトからの大声援を受けるなかでのファイナルセットスタートとなった。一進一退の攻防を繰り返しながら先にチャンスをつかんだのは古田で 4-4 の 40-0。しかしここ

から逆転を許し、4-5 で近藤がリード。近藤がそのまま押し切るかに思えたが、古田は攻めの姿勢を崩さず、続くファーストポイントをリターンエースで取ると、その後は1ポイントしか落とさず7-5で勝利し、決勝進出を決めた。近藤は惜しくも敗れたが、ガッツあふれるプレーに会場から惜しめない賞賛の拍手が送られた。



仲間からの声援を受ける近藤選手

もう一つの準決勝、第2シード秀明英光と第3シード四日市工戦は、シングルス1が四日市工・遠藤。シングルス2が秀明英光・大城。ダブルスは、1stセットを四日市工・服部・長岡が取り、2ndセットも2-0とリード。試合を優位に進めていたが、秀明英光・川崎・鈴木が粘りを見せタイブレークへ突入した。ここでお互いに主導権を握ろうと、いろいろな仕掛けをするがうまくかみ合わず、遂にタイブレークもポイント6-6に。最後の集中力を見せた秀明英光が続く2ポイントを強打で取り切った。ファイナルセット、秀明英光の勢いは止まらず、6-1で取り試合を決めた。



秀明英光・川崎・鈴木組

13時40分。3面展開で秀明英光と名古屋の決勝戦が始まった。ダブルス、名古屋・戸田・中川 対 秀明英光・川崎・鈴木の試合は、名古屋から2-0,2-3,5-3,6-6。タイブレークも5-5。どちらに転んでもおかしくないシーソーゲームの果てに、名古屋が最後の2ポイントを取りセットカウントは1-0になった。この時点で試合開始から約1時間が経過していたが、シングルスも含め全体的に名古屋の勢いが感じられ、秀明英光はそれに耐えるという構図に見えた。しかしこの流れは30分後には一転した。シングルス2 秀明英光・大城が名古屋・佐藤に勝利すると、ダブルスは名古屋から、7-6,3-3 シングルス1は6-3,5-6。特にダブルスは3-0から3-3に追いつかれており、何となく秀明英光の流れに。だが結局ダブルスは名古屋が取り、優勝はシングルス1 秀明英光・喜多、名古屋・古田 にかかることになった。このシングルス1、1stセットは名古屋の強打が冴え6-3。2ndセットは3-5からの逆転で秀明英光7-5。ファイナルセットは名古屋が3-1とリードするものの、ここから引き離せず、逆に秀明英光が4ゲーム連取などで逆転し6-4で勝利。初優勝を決めた。



秀明英光・喜多選手



秀明英光高校

女子ベスト8は次の学校。

駿台甲英（兵庫）・県岐商（岐阜）・札幌日大（北海道）・柳川（福岡）・椋山女学園（愛知）・富士見丘（東京）・京都外大西（京都）・仁愛女子（福井）。近畿2校，関東・北海道・九州・北信越各1校，東海2校と全国的に分散した形になった。

4シード全てが出そろった準決勝は，駿台甲英が柳川を2-1で，仁愛女子が椋山女学園を2-1で下し，決勝戦は第1シード駿台甲英と第2シード仁愛女子の顔合わせとなった。殊勲は仁愛の菅村。準決勝でも井上（椋山女学園）をファイナルセットの末下した菅村は，古賀とのシングルス1対決でも，経験やショットの切れで上回る古賀に対し，ショットの力や走力，気持ちの持ち方などの総合力で挑み，6-2,6-3のストレートで勝利した。ダブルスでも仁愛・中村・丸山が駿台甲英・大麻・野井に6-4,2-6,6-2で勝ち，優勝を決めた。シングルス2は仁愛・井上から5-7,7-6(4),1-3で打ち切り。駿台甲英は一つ一つのプレーでいうと仁愛女子と互角以上のものをもっているように見えた。しかし仁愛女子は試合の流れ，特に小さな流れをつかむのがうまく，要所や小さな要所でポイントを重ね，その差を結果に結びつけた。2度目の優勝である。



仁愛女子 中村・丸山組



仁愛女子高校

<個人戦・シングルス>

8月1日夕方から2日朝まで続いた強い雨のため，決勝戦のみ3セットマッチ，その他は8ゲームマッチで行われた。

男子ベスト8は次の選手。丸数字は学年。遠藤 豪③（三重・四日市工業），今井 慎太郎①（神奈川・湘南工大附），菊池 玄吾③（東京・東海大菅生），近藤 大基②（神奈川・湘南工大附），伊藤 祐樹③（神奈川・法政二），李在紋①（茨城・東風），上原 伊織②（兵庫・甲南），田川翔太③（神奈川・湘南工大附）。関東6名，東海1名，近畿1名，と関東の圧倒的な強さが光った。



遠藤 豪選手

優勝したのは遠藤。今年の選抜個人決勝と同じ，田川との顔合わせとなった。重苦しい雰囲気の中が始まった決勝戦，遠藤はファーストゲームのブレイクに成功するが続く第2ゲームは0-40のピンチ。しかしここをサービスエースを含む落ち着いたあるプレーで乗り切り2-0でとると，その後も丁寧なラリーの中に要所の強打を決め，6-2,6-1で制した。田川も鋭いショットを決めるが単発に終わり，涙をのんだ。ベスト4には，強力なサーブとフォ

アで第4シードを破り遠藤にも7-9とあと一步まで迫った菊池、1年生ながら落ち着いたのがある力強いプレーを見せた李が入った。

女子ベスト8は次の選手。井上 雅③（愛知・椋山女学園）、長谷川 茉美③（熊本・ルーテル）、今西 美晴②（京都・京都外大西）、小和瀬 麻帆③（千葉・渋谷幕張）、古賀 愛③（兵庫・駿台甲英）、大坪 慧美①（和歌山・慶風）、美濃越 舞②（千葉・秀明八千代）、江口 実沙②（東京・富士見丘）。関東3名、関西3名、東海1名、九州1名。

決勝は第1、4、5シードを破り波に乗る小和瀬と、第2シードの江口を接戦の9-7で破った美濃越の千葉県対決となった。団体・ダブルス・シングルの3種目に出場し少々疲労の残る美濃越に比べ、体力、精神力の充実している小和瀬がその勢いそのまま終始試合を優勢に進め、6-2、6-3で栄冠を勝ち取った。千葉県大会で勝っている美濃越はリベンジを許す形となってしまったがまだ2年生。来年に期待したい。



小和瀬 麻帆選手

昨年準優勝の井上は準決勝で涙をのみ、古賀と並んでベスト4。

昨年ベスト8に入り、今年は第4シードと期待された石津幸恵②（土浦日大）、今西、江口、そして美濃越など、来年も激しい戦いが予想される。

<個人戦・ダブルス>

男子ダブルスベスト4は次の選手。菊池玄吾③次山拳生②（東海大菅生）、西田昇吾②近藤翔英③（柳川）、田川翔太③古橋弘章③（湘南工大附）、徳田拓哉③林奕倫②（岡山学芸館）。関東勢同士の戦いとなった決勝戦、1stセット6-3で取った田川・古橋ペアが2ndセット5-3とリードし押し切るかに思われたが、菊池・次山接戦をものにし7-5で逆転。勝敗の行方はわからなくなった。ファイナルセットも互いにワンプレイクで4-4。最後は田川・古橋が6-4とし競り勝った。



田川・古橋ペア

女子ダブルスベスト4は次の選手。穂積絵莉①前原まりあ①（湘南工大附）、永井陽子③岡崎恵美③（慶風）、大原かこの③齊藤杏奈③（宮崎商）、江口実沙②伊藤夕季①（富士見

丘)。決勝に進出したのは穂積・前原ペアと大原・齊藤ペア。決勝戦は 2-2、4-4 と一進一退の攻防が続いた後、5-4 の 40-0 と大原・齊藤がセットポイントを握る。しかしここで穂積・前原は今までになかった強気なプレー（中ロブをドライブボレー）を見せ逆転する。1st7-6(3) で取った同ペアは続くセカンドセットも 6-3 で押し切り、優勝を決めた。ガッツ溢れるプレーで最後まで戦った大原・齊藤は、あと一歩及ばなかった。



穂積・前原ペア

<おわりに>

個人戦，女子シングルスでは千葉県勢同士の決勝戦が繰り広げられ，男女ダブルスでは湘南工科大附属がアベック優勝するなど関東勢の活躍が光った。一方男子シングルス優勝，遠藤豪選手の四日市工業高校金山敦思監督は，平成 12 年度岐阜インターハイのシングルスで優勝しており，チャンピオンがチャンピオンを育てた形となった。

今回の本番に向け，2 年間で 16 回の審判講習会，6 回の実戦で経験を積んだ審判補助員をはじめ約 500 人の補助員もがんばった。特に 8 月 1 日の夜まで続いた試合では，時折降る強い雨でずぶ濡れになりながら，また 2 日は天候を見ながらの進行であったにもかかわらず臨機応変に対応し，期間中を通して立派に責任を果たした。緊張を強いられる審判員たちの感想の中で印象的なのが「試合後，握手してくれたときにうれしかった。やりがいを感じた」という言葉である。選手と補助員という立場の違いはあるが，同じテニス仲間としての心の触れあいは今後も大切にしていきたいものである。

「厳しい状況であればあるほど勝利へのこだわりとスポーツマンシップは矛盾しない。激しい闘争心と美しいマナーを兼ね備えたハイレベルの試合を期待します。」

大会パンフレットの馬瀬部長のあいさつである。先人達が大切にしてきたもの，その土台の上に今大会はあった。

来年度は高体連全 32 種目の先陣を切って，100 周年の記念すべき大会が沖縄で開催される。

1 年後新しい歴史が始まる前に，今一度原点に戻ってこの言葉をかみしめたい。